

南琉球宮古多良間方言における2種類のアクセント型の中和

著者	青井 隼人
雑誌名	国立国語研究所論集
号	13
ページ	1-23
発行年	2017-07
URL	http://doi.org/10.15084/00001369

南琉球宮古多良間方言における 2 種類のアクセント型の中和

青井隼人

日本学術振興会 特別研究員 (PD) / 国立国語研究所 外来研究員

要旨

南琉球宮古多良間方言は、下降の有無と位置によって区別される三型アクセント体系を有する。3つのアクセント型の区別は、常にどのような環境においても実現するわけではなく、様々な環境において様々な組み合わせで中和する (青井 2012, 2016a, 2016d)。本稿では、当該韻律句内に含まれる韻律語数が1で、かつ当該韻律句末と発話末とが一致しない環境 (いわゆる接続形) において観察される2種類のアクセント型の中和に焦点を当てる。

本研究では、上記の環境における2種類の型の中和を説明するため、五十嵐 (2015) を参考に、2つの作業仮説を立てる。すなわち①下降2型 (F2型) のアクセント規則の改定と②「韻律句の拡張」である。本稿では以上の2つの仮説を検証するためにおこなった現地調査の結果を報告する。本研究の調査結果はいずれの仮説に対しても否定的な結果を得ており、したがって① F2型のアクセント規則の改定は妥当ではない、そして②「韻律句の拡張」を仮定することは妥当ではないと結論づける*。

キーワード: 南琉球宮古多良間方言, 三型アクセント, 型の中和, ピッチ上昇

1. 序論

南琉球宮古多良間方言 (以下、多良間方言) は、韻律句 (1つ以上の語根と0以上の接語からなる韻律単位。いわゆる文節。Prosodic Phrase; PPh) のモーラ数に関わらず、それをドメインとして最大で3つのアクセントが区別される三型アクセント体系を有する。多良間方言のアクセントに関する記述は、松森 (2010) によって三型体系が報告されて以来、松森 (2014)、五十嵐 (2015, 2016) そして青井 (2012, 2016a) などによって精力的に進められてきた。しかしながらその体系はかなり複雑な様相を呈しており、いまだ全体像の解明には至っていない。本稿では、多良間方言のアクセント体系に関する未解決の問題の1つとしてアクセント型の中和を取り上げる。

本稿の構成は以下の通りである。まず第2節で多良間方言の名詞アクセント体系を概観し、第3節以降の議論で必要な知識を提供する。多良間方言のアクセントの特徴は以下の2点である：①3つのアクセント型の区別を有する；②3つのアクセント型の区別を記述するためには2モーラ以上の語根もしくは接語が写像される韻律単位 (すなわち韻律語 Prosodic Word; PWd) を導入する必要がある。

第3節以降では多良間方言の型の中和に焦点を当てる。青井 (2016a, 2016d) でも指摘したよ

* 本稿は、琉球諸語記述研究会第10回研究発表会 (2016.9.25 於九州大学；青井 2016b) での口頭発表および言語音声学研究会第19回大会でおこなった招待講演 (2016.12.11 於東京外国語大学) を基にしている。なお本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「関係性に着目した宮古語音韻構造の探究」(平成26～28年度) の助成を受けて、2014年4月～2017年3月まで国立国語研究所に日本学術振興会特別研究員PDとして滞在した際の研究成果の一部である。

うに、多良間方言では、当該韻律句内に含まれる韻律語数が1であり、かつ韻律句末と発話末とが一致しない環境（いわゆる接続形）において2種類の型の中和が観察されている。両中和をそれぞれどのように説明できるかが多良間方言アクセントをめぐる未解決問題の1つである。第3節では両中和を取り上げて議論している2つの先行研究（青井（2012）および五十嵐（2015））をレビューし、本稿が取り組む課題を明らかにする。第4節では本研究の調査方法について記述し、第5節で結果と考察を述べる。

第6節では、本調査の結果を記述する過程で明らかになった多良間方言アクセントの別の未解決問題について簡単に述べる。その問題とは、アクセントによるピッチの上昇（松森 2016a, 2016b；青井 2016c）である。最後に第7節で結論と今後の課題を述べる。

2. 多良間方言の名詞アクセント体系

本節では、第3節以降の議論で最低限必要となる多良間方言の名詞アクセント体系に関する知識を素描する。多良間方言の名詞アクセント体系に関する詳細な記述は、松森（2014）、五十嵐（2015, 2016）および青井（2016a, 2016d）を参照してほしい。また、動詞アクセントの初期的な記述については青井（2016d）を参照してほしい。

多良間方言の名詞アクセントは最大3つの型が区別される三型体系を有する。3つの型は、韻律句内におけるピッチの下降の有無と位置によって区別される（松森 2014；五十嵐 2015, 2016；青井 2016a, 2016d）。たとえば2モーラ接語 =*mai*「も」が付加された場合、3つのアクセント型の区別は(1)のように実現される。なお例文中の“*]*”は急激な下降を，“*.*”（ドット）はモーラ境界を表す。また“()_{PWd}”は韻律語（後述）の境界を表し，“{ }_{PPH}”は韻律句の境界を表す（以下同様）。

(1) 多良間方言における名詞アクセントの3つの型の区別

- a. 下降1型 (F1型) : *madu=mai* ... 「暇も…」
 {(ma.du)_{PWd}(ma.i)_{PWd}}_{PPH}
 ma]dumai …当該名詞 *madu* で下降
- b. 下降2型 (F2型) : *jadu=mai* ... 「戸も…」
 {(ja.du)_{PWd}(ma.i)_{PWd}}_{PPH}
 jaduma]i …後続の助詞 =*mai* で下降
- c. 平板型 (F0型) : *juda=mai* ... 「枝も…」
 {(ju.da)_{PWd}(ma.i)_{PWd}}_{PPH}
 judamai …韻律句内に下降なし

(1)において、3つのアクセント型の区別は次のように実現される。すなわち、(1a) 当該名詞語根 *madu*「暇」の次末モーラで急激にピッチが下降する；(1b) 付加された2モーラ接語 =*mai*「も」の次末モーラで急激にピッチが下降する；(1c) 韻律句内に急激なピッチの下降がない。本稿では、表層形のピッチパターンから、3つの型をそれぞれ下降1型 (F1型)、下降2型 (F2型)、平板型 (F0

型) と呼ぶことにする¹。

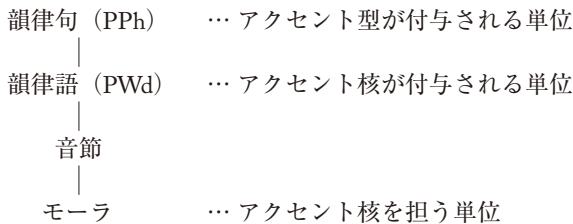
3つの型のピッチパターンは(2)のように一般化することができる(松森 2014; 五十嵐 2015; 青井 2016a, 2016d)。

(2) 多良間方言の3つのアクセント型のピッチパターン

- a. F1型: 韻律句の左から1つ目の韻律語の次末モーラで下降する。
- b. F2型: 韻律句の左から2つ目の韻律語の次末モーラで下降する。
- c. F0型: 韻律句内部に急激なピッチの下降がない。

多良間方言のアクセントを正しく記述するためには、(2)に示すように、韻律語(Prosodic Word; PwD)という特有の韻律単位を導入する必要がある²。韻律語とは、モーラと韻律句のあいだに位置する、2モーラ以上の語根および接語が写像される韻律単位である(五十嵐 2015: 9)。つまり、多良間方言には(3)のような韻律階層が假定できる(青井 2016a, 2016d)。後述するように、アクセント核はモーラが担うが、その位置を決定するためにはモーラだけを参照するのでは不十分であり、韻律語も併せて参照する必要がある(松森 2014; 五十嵐 2015; 青井 2016a, 2016d)。

(3) 多良間方言の韻律階層(青井 2016d: 73)



(1)の例からもわかるように、2モーラ以上の語根および接語はそれのみで独立した韻律語を形成することができる。一方、1モーラ語(具体的には主格助詞=*nu*や焦点助詞=*du*など)は独立した韻律語を形成することができない。このとき、独立した韻律語を作ることができない1モーラ語は先行する語根もしくは接語と組み合わさって1つの韻律語を形成する。1モーラ語を含む韻律句内部の韻律語の形成プロセスについては、第3節で改めて扱う。

さて、多良間方言の名詞アクセント体系についてこれまでの研究で明らかにされたことを(4)に要約してみよう(松森 2010, 2014; 五十嵐 2015, 2016; 青井 2016a, 2016d)。

¹ 松森(2010, 2014)および五十嵐(2015, 2016)は、琉球祖語に想定される3つのアクセント型(系列)との対応関係から、各型をA型・B型・C型と呼んでいる。本稿で用いる名称との対応は以下の通りである: 下降1型(F1型)=C型, 下降2型(F2型)=B型, 平板型(F0型)=A型。

² 同様の単位は宮古池間方言(五十嵐 2016など)、宮古与那覇方言(松森 2013)、八重山黒島方言(松森 2015, 2016b)などでも報告されており、南琉球の諸方言で広く認められる可能性があることが松森(2015)や五十嵐(2016)によって指摘されている。

(4) 多良間方言の名詞アクセント体系の特徴

- a. 3つのアクセントの区別を有する（すなわち三型体系である）。
- b. 3つのアクセント型は、韻律句内部に現れる下降の有無と位置によって区別される。
- c. 3つのアクセント型の区別を記述するためには、韻律句とモーラに加えて、韻律語を参照する必要がある。

青井（2016d）で私は、私自身の資料に加えて松森（2014）および五十嵐（2015）の記述も踏まえ、(5)の基底表示と(6)の3つの規則を提案した。なお、表現の仕方は多少異なっているものの、韻律句をアクセントが実現するドメインとする点、韻律語をアクセント核付与の単位とする点、モーラがアクセント核を担うとする点などは、松森（2014）、五十嵐（2015）、青井（2016a, 2016d）に共通している。

(5) 多良間方言の3つのアクセント型の基底表示

- a. F1型：有核。当該語根から始まる韻律句の1つ目の韻律語に核を指定する。
- b. F2型：有核。当該語根から始まる韻律句の2つ目の韻律語に核を指定する。
- c. F0型：無核。

(6) 多良間方言のアクセントの実現規則

- a. アクセント核付与規則
 - －韻律句の初頭の語根のアクセント型がF1型なら、当該韻律句の左から1つ目の韻律語にアクセント核を付与せよ。
 - －韻律句の初頭の語根のアクセント型がF2型なら、当該韻律句の左から2つ目の韻律語にアクセント核を付与せよ。
- b. 下降位置確定規則

付与された韻律語の次末モーラにアクセント核を付与せよ。
- c. 音調付与規則

アクセント核が指定されたモーラまではH音調を付与し、それ以降のモーラにはL音調を付与せよ。

(7)に(1)におけるアクセントの実現プロセスを例示しよう（青井2016d: 73）。アクセント核は付与されたモーラの右肩にアスタリスク“*”を付すことによって示す。

(7) アクセント実現規則の適用過程①：(1)の場合

	a. F1型 <i>madu</i> 「暇」	b. F2型 <i>jadu</i> 「戸」	c. F0型 <i>juda</i> 「枝」
形態統語構造	<i>madu=mai</i> ...	<i>jadu=mai</i> ...	<i>juda=mai</i> ...
音韻構造	{(ma.du) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ja.du) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ju.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh}
実現規則 (6a, b)	{(ma*.du) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ja.du) ^{PWd} (ma*.i) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ju.da) ^{PWd} (ma.i) ^{PWd} } ^{PPh}
実現規則 (6c)	H L	H L	H
ピッチパターン	ma]dumai	jaduma]i	judamai

(5)の基底表示および(6)の実現規則は、多良間方言に3つのアクセント型の区別があること、3つの型がアクセント核の有無と位置とによって区別されること、そしてアクセント核がどのような位置に付与されるかを正しく捉えることができている。しかしながら、多良間方言のアクセントの実現をより広範な範囲で捉えるためには、五十嵐(2015: 40)も明言しているように、従来の基底表示および実現規則をさらに改定する必要がある。なぜなら(5)の基底表示および(6)の実現規則では記述できないピッチパターンが五十嵐(2015)や松森(2016a, 2016b)、青井(2012, 2016c, 2016d)などで報告されているからである。第3節以降では、そのようなピッチパターンのうち、当該韻律句内に含まれる韻律語数が1であり、かつ韻律句末と発話末とが一致しない環境(いわゆる接続形)で観察される2種類の型の中和を取り上げ、議論する。

3. 先行研究

本節では、まず多良間方言で観察されるアクセント型の中和パターンを整理する(3.1節)。青井(2016a, 2016d)で記述したように、多良間方言のアクセント型の中和は、当該韻律句内に含まれる韻律語の数と当該韻律句末と発話末とが一致するか否かの2つの観点によって整理することが可能である。ただし、当該韻律句内に含まれる韻律語の数が1で、かつ当該韻律句末と発話末とが一致しない環境においては2種類の型の中和(下降中和と平板中和)が観察されており、上記の分類法ではそれらを正しく区別することができない。3.2節と3.3節では、これら2種類の型の中和について取り上げている2件の先行研究をそれぞれレビューし(青井2012; 五十嵐2015)、最後に本稿が取り組む課題を指摘する。

3.1 型の中和と韻律構造

第2節で述べたように、多良間方言は最大で3つのアクセント型の区別を持つ。しかしながらその3つの型の対立はどのような環境でも常に実現されるわけではない。言い換えれば環境によって型の対立は中和する。

環境とアクセント型の対立・中和の関係は次頁の表1のように表すことができる(青井2016a, 2016d)。なお表中の“~”は型の中和を表し、“/”は型の対立を表す(以下同様)。表1に示したように、多良間方言の型の区別の実現パターンは、①当該韻律句内に含まれる韻律語はいくつか、②当該韻律句末と発話末は一致するか(言い換えれば、単独形もしくは言い切り形であるか、接続形であるか)という2点によって整理することができる。ただし、すぐ後で述べるように、この分類法では一部の環境(表中で二重線で囲った箇所)についてはうまく型の中和を捉えることができない。

単独形と言切り形(当該韻律句末と発話末とが一致する場合)では、当該韻律句に含まれる韻律語の数が3以上のときに初めて3つの型の対立が実現される。それに対して、韻律語数が2もしくは1の場合には型の中和が観察される。型の中和パターンは、韻律語数が2のときと1のときとは異なっており、前者の環境ではF2型とF0型が中和し、後者の環境では全ての型が中和する。

表1 アクセント型の区別の実現パターン (青井 2016d: 74)

韻律語の数	1	2	3
単独形・言い切り形	F1 ~ F2 ~ F0	F1 / F2 ~ F0	F1 / F2 / F0
接続形	F1 / F2 ~ F0 F1 ~ F2 / F0	F1 / F2 / F0	F1 / F2 / F0

接続形（当該韻律句末と発話末とが一致しない場合）では、当該韻律句に含まれる韻律語が2以上であれば、3つの型の区別が実現される。一方、当該韻律句に含まれる韻律語数が1の場合、型の区別は2つしか実現されない。このとき、表1を見るとわかるように、型の中和には2種類が観察されている。1つはF2型とF0型の中和であり、もう1つはF1型とF2型の中和である。青井（2016a, 2016d）に従って、前者の中和を「平板中和」、後者の中和を「下降中和」と呼ぶことにしよう。本節ではこの2種類の中和をめぐる問題に焦点を当てる。なお多良間方言における型の中和の詳細な記述は青井（2016a, 2016d）を参照してほしい。

3.2 青井 (2012)

当該韻律句に含まれる韻律語数が1であり、かつ韻律句末と発話末が一致しない場合に2種類の型の中和が観察されるという事実は、青井(2012)によって初めて指摘された(ただし青井(2012)は「韻律語」ではなく「フット」を用いている³⁾。

まずは2種類の型の中和の具体例を観察しよう。平板中和 (F1/F2~F0) は主格助詞 =nu のような1モーラ接語が単独で付加された環境で現れる (青井 2012, 2016a, 2016d)。

(8) 平板中和 (F1/F2~F0; F2型とF0型の中和)

- a. F1型: *madu=nu* ... 「暇が^s…」

{(ma.du.nu)^{PWa}}^{PPh}

*madu*nu

…韻律句内に下降あり

- b. F2型: *jadu=nu* ... 「戸が^s…」

{(ja.du.nu)^{PWa}}^{PPh}

jadunu

…韻律句内に下降なし

Cf. (1b) *jaduma*i

- c. F0型: *juda=nu* ... 「枝が^s…」

{(ju.da.nu)^{PWa}}^{PPh}

judanu

…韻律句内に下降なし

} 中和

韻律語は2モーラ以上の語根もしくは接語が写像される韻律的単位であるため、1モーラ接語

³ 宮古伊良部方言 (Shimoji 2009) および宮古池間方言 (Igarashi et al. forthcoming) の記述においては、モーラより大きい韻律的単位として、2モーラ (もしくは3モーラ) の長さを基本とするフットが定義されている。しかし、五十嵐 (2015) が検討したように、同様に定義される韻律的単位であるフットを多良間方言に導入しても、アクセントの実現形を正しく記述することはできない。

は単独で韻律語を形成することができない。1 モーラ接語は、(8) に示したように、先行する語根や接語と1つの韻律語を形成する(松森 2014; 五十嵐 2015; 青井 2016a, 2016d)。

(8) を見るとわかるように、1 モーラ接語が単独で付加される環境では、F2 型と F0 型の区別が中和する。すなわちどちらも韻律句内に急激なピッチの下降がないパターンで実現される。このとき中和の方向性は F2 型から F0 型(中和の方向性を“>”によって表すならば、F2 > F0)と考えることができる。なぜなら(8)の中和は F2 型のピッチ下降が実現されないことによって引き起こされているからである((1b)における F2 型のアクセントの実現と比較してほしい)。

一方、1 モーラ接語が2つ連続して付加される場合には下降中和(F1~F2/F0)が生じる。たとえば主格助詞 =nu にさらに焦点助詞 =du が続けて付加されるような環境では、(9) のような型の中和が観察される。

(9) 下降中和 (F1~F2/F0; F1 型と F2 型の中和)

- | | | | |
|----|-------|--|------------|
| a. | F1 型: | <i>madu=nu=du ...</i> 「暇がゾ…」 | |
| | | {(ma.du.nu.du) ^{PWα} } ^{PPh} | |
| | | madunu]du | …韻律句内に下降あり |
| b. | F2 型: | <i>jadu=nu=du ...</i> 「戸がゾ…」 | |
| | | {(ja.du.nu.du) ^{PWα} } ^{PPh} | |
| | | jadunu]du | …韻律句内に下降あり |
| | | Cf. (1b) jaduma]i | |
| c. | F0 型: | <i>juda=nu=du ...</i> 「枝がゾ…」 | |
| | | {(ju.da.nu.du) ^{PWα} } ^{PPh} | |
| | | judanudu | …韻律句内に下降なし |

すでに言及したように、1 モーラ接語は単独で韻律語を形成することができない。したがって、(9) においては、1 モーラ接語 =nu および =du は先行する名詞語根と1つの韻律語を形成する。

この環境では F1 型と F2 型が中和する。すなわちどちらも韻律句内の同じ位置((9)の場合、2つの助詞 =nu と =du のあいだ)にピッチの下降が生じるパターンで実現される。下降中和は、当該韻律句内の2つ目の韻律語において実現されるはずの F2 型のアクセント核が、1つ目の韻律語(つまり F1 型と同じ位置)において実現されているために生じたと考えられる。したがって中和の方向性は F2 > F1 である。

青井(2012)は、接続形における2種類の中和のうち、平板中和について、韻律語(青井(2012)では「フット」)形成の観点から説明している。すなわち、(6a)の規則に従えば、F2 型のアクセント核は当該韻律句内の左から2つ目の韻律語に付与される。しかし(8)のように単純名詞に1モーラ接語が付加される場合、その韻律句内に含まれる韻律語は1つしかない。つまり、F2 型のアクセント核が付与される韻律語が存在しない。そのようなとき、F2 型のアクセント核はどこにも付与されず、その結果 F2 型の下降は実現されないと考えれば、F0 型との中和を説明することができる。以上の過程は(10)のように表現することができる((8)を例にとる)。

(10) アクセント実現規則の適用過程②：(8) の場合

	a. F1 型 <i>madu</i> 「暇」	b. F2 型 <i>jadu</i> 「戸」	c. F0 型 <i>juda</i> 「枝」
形態統語構造	<i>madu=nu ...</i>	<i>jadu=nu ...</i>	<i>juda=nu ...</i>
音韻構造	{(ma.du.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ja.du.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ju.da.nu) ^{PWd} } ^{PPh}
実現規則 (6a, b)	{(ma.du*.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ja.du.nu) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ju.da.nu) ^{PWd} } ^{PPh}
実現規則 (6c)	$\begin{array}{c} \swarrow \quad \\ H \quad L \end{array}$	$\begin{array}{c} \swarrow \\ H \end{array}$	$\begin{array}{c} \swarrow \\ H \end{array}$
ピッチパターン	madu]nu	jadunu	judanu

以上の説明は、1 モーラ接語が単独で付加される環境において F2 型が F0 型と中和する事実をうまく捉えている。しかし、ここで問題となるのは、韻律構造は等価であるはずの (9) では異なるタイプの型の中和（つまり下降中和）が観察される事実である。つまり当該韻律句に1つしか韻律語が存在しない環境では F2 型のアクセントが実現しないのだとしたら、韻律構造上は同じである (9) においても平板中和が起こるはずである。(11) に (9) の規則適用過程と予測される実現形を示す。

(11) アクセント実現規則の適用過程③：(9) の場合

	a. F1 型 <i>madu</i> 「暇」	b. F2 型 <i>jadu</i> 「戸」	c. F0 型 <i>juda</i> 「枝」
形態統語構造	<i>madu=nu=du ...</i>	<i>jadu=nu=du ...</i>	<i>juda=nu=du ...</i>
音韻構造	{(ma.du.nu.du) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ja.du.nu.du) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ju.da.nu.du) ^{PWd} } ^{PPh}
実現規則 (6a, b)	{(ma.du.nu*.du) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ja.du.nu.du) ^{PWd} } ^{PPh}	{(ju.da.nu.du) ^{PWd} } ^{PPh}
実現規則 (6c)	$\begin{array}{c} \swarrow \quad \\ H \quad L \end{array}$	$\begin{array}{c} \swarrow \\ H \end{array}$	$\begin{array}{c} \swarrow \\ H \end{array}$
ピッチパターン	madunu]du	*jadunudu Cf. (9b) jadunu]du	judanudu

2つ目の韻律語が当該韻律句に存在しない場合 F2 型のアクセントは実現されないとすると、(9) においても F2 型のアクセントは実現されないはずである。しかし実際には、この環境においては F2 型のアクセントは1つ目の韻律語で実現され（つまり (9b) jadunu]du）、その結果 F1 型と中和する。つまり (11) の適用プロセスでは誤った結果を予測してしまうことになる。

(9) のように1 モーラ接語が連続して付加される環境において、なぜ F2 型は、F0 型とではなく、F1 型と中和するのだろうか。上記の問題について、青井 (2012) は残された課題として指摘するとどめ、具体的な解釈案を提示していない。

3.3 五十嵐 (2015)

接続形における2種類の中和について、青井 (2012) は、平板中和を F2 型のアクセントの非実現として説明した。一方、下降中和については妥当な説明を与えることができず、今後の課題としている。それに対して、五十嵐 (2015) は、(6) のアクセント規則では下降中和を正しく捉

えることができないことを指摘した上で、(12) のようにアクセント規則を改定することを提案している。

(12) 五十嵐 (2015: 18-19) のアクセント規則 ((6) に合わせて表現を改変)

a. アクセント核付与規則

- 韻律句の初頭の語根のアクセント型が F1 型なら、当該韻律句の左から 1 つ目の韻律語にアクセント核を付与せよ。
- 韻律句の初頭の語根のアクセント型が F2 型なら、当該韻律句の左から 2 つ目の韻律語 (それが存在しない場合は 1 つ目の韻律語) にアクセント核を付与せよ。

b. 下降位置確定規則

付与された韻律語の次末モーラにアクセント核を付与せよ。

c. 音調付与規則

アクセント核が指定されたモーラまでは H 音調を付与し、それ以降のモーラには L 音調を付与せよ。

(12) の下線部が(6)のアクセント規則に付け加えられた附則である。すなわち、F2 型のアクセント型を持つ語根が韻律句の初頭にある場合、アクセント核は通常その韻律句の 2 つ目の韻律語に付される；ただしアクセント核が付されるはずの 2 つ目の韻律語が存在しない場合 (つまり当該韻律句内に 1 つしか韻律語が含まれない場合) には、1 つ目の韻律語にアクセント核が付される。

(12) の規則の適用プロセスを示したのが (13) である ((9) を例にとる)。

(13) アクセント実現規則の適用過程④：(9) の場合 ((12) を適用)

	a. F1 型 <i>madu</i> 「暇」	b. F2 型 <i>jadu</i> 「戸」	c. F0 型 <i>juda</i> 「枝」
形態統語構造	<i>madu=nu=du ...</i>	<i>jadu=nu=du ...</i>	<i>juda=nu=du ...</i>
音韻構造	{(ma.du.nu.du) ^{PW_a} } ^{PP_h}	{(ja.du.nu.du) ^{PW_a} } ^{PP_h}	{(ju.da.nu.du) ^{PW_a} } ^{PP_h}
実現規則 (12a, b)	{(ma.du.nu*.du) ^{PW_a} } ^{PP_h}	{(ja.du.nu*.du) ^{PW_a} } ^{PP_h}	{(ju.da.nu.du) ^{PW_a} } ^{PP_h}
実現規則 (12c)			
ピッチパターン	madunu]du	jadunu]du	judanudu

Cf. (11b) *jadunudu

当該の韻律句に含まれる韻律語が 1 つしかない場合には、F2 型のアクセント核は 1 つ目の韻律語に付される。そのように考えることによって、(9) のように 1 つの韻律句に 1 つしか韻律語を含まない環境における F1 型との中和 (つまり下降中和) を正しく捉えることが可能になる。それに対して、(6) の規則を適用した場合には、(11) に示したように、誤った結果を予測してしまう。

ところが、五十嵐 (2015) が提案したアクセント規則 (12) では、下降中和を正しく記述できる一方で、平板中和の説明に問題が残る。なぜなら、(12) が妥当であれば、(8) のように単純名詞に 1 モーラ助詞が単独で後続する環境でも下降中和が生じることが予測されるからである。

しかし (8) で実際に観察されたのは平板中和である。なぜ (8) では下降中和ではなく平板中和が生じるのだろうか。

五十嵐 (2015) は平板中和が残された課題であることを明言している。ただし検討すべき価値のある可能性として「韻律句の拡張」を挙げている。すなわち、韻律句は1つ以上の語根と0以上の接語が写像される韻律的単位であるが、それがあある条件下ではより大きな統語的単位が写像される韻律単位となるという可能性である。たとえば (8) の韻律構造を、(14) のように、後続する述語までが1つの韻律句であると仮定することができれば、平板中和が起こることを正しく捉えることができる。

(14) 韻律句が述語まで拡張された場合の韻律構造とピッチパターン ((8) の場合)

- | | |
|--|-------------|
| <p>a. F1 型 : <i>madu=nu neen</i>. 「暇がない。」
 $\{(ma.du.nu)^{Pw_a}(ne.e.n)^{Pw_a}\}^{PPh}$
 <i>madu]nune:n</i></p> <p>b. F2 型 : <i>jadu=nu neen</i>. 「戸がない。」
 $\{(ja.du.nu)^{Pw_a}(ne.e.n)^{Pw_a}\}^{PPh}$
 <i>jadunune:]n</i></p> <p>c. F0 型 : <i>juda=nu neen</i>. 「枝がない。」
 $\{(ju.da.nu)^{Pw_a}(ne.e.n)^{Pw_a}\}^{PPh}$
 <i>judanune:]n</i></p> | <p>} 中和</p> |
|--|-------------|

(14) のような韻律構造を仮定した場合、(14b) F2 型のアクセントが1つ目の韻律語 (*ja.du.nu*) Pw_a で実現されないことをうまく捉えることができる。つまり、(14) の韻律構造は (9) のそれとは異なっており、1つの韻律句内に2つの韻律語を含んでいる。このとき、表1を見るとわかるように、F2 型は、F1 型とではなく、F0 型と中和することになる。それは F2 型のアクセント核が2つ目の韻律語である (*ne.e.n*) Pw_a に付されることになり、その結果 F0 型の発話末の下降と一致するからである⁴。

五十嵐 (2015) が提案した F2 型のアクセント規則の改定が妥当であり、さらに五十嵐 (2015) が可能性として指摘した「韻律句の拡張」が妥当であれば、平板中和と下降中和の両方を区別して説明することが可能になる。しかしながら、「韻律句の拡張」の妥当性は現時点では平板中和の説明以外に独立して認めることができている点で問題が残されている。

また、五十嵐 (2015) が提案した F2 型のアクセント核付与規則の改定についてもさらなる検討が必要である。なぜなら、青井 (2016d) でも指摘したように、「韻律句の拡張」を仮定する必要性は F2 型のアクセント核付与規則の改定を前提としていることから生じているからである。すなわち、「F2 型のアクセント核は、当該の韻律句に2つ目の韻律語がない場合には、1つ目の

⁴ 発話末と一致する韻律句末に H 音調が付与されている場合、その H 音調は削除され、L 音調が付与される (Final Lowering 規則; 五十嵐 2015: 29)。

韻律語に付与される」という規則から予測される中和のパターン（下降中和）と実際に観察される中和のパターン（平板中和）とが異なることを説明するために「韻律句の拡張」という操作が必要になるわけである。ところが、青井（2012）のように、F2 型のアクセントは当該の韻律句が1つの韻律語しか含まない場合には実現されないと仮定すれば、「韻律句の拡張」を導入せずとも平板中和を説明することは可能である。

そこで第4節以降では、多良間方言のアクセントに関する新たな資料を提示した上で、五十嵐（2015）が提案した2つの仮説（つまりF2型のアクセント核付与規則の改定と「韻律句の拡張」）の妥当性を検討する。第4節では本研究の調査方法について記述し、第5節で調査の結果と考察を述べる。

4. 方法

調査は2016年7月～8月に沖縄県宮古郡多良間村（多良間島）で実施した。協力者は男性1名（1935年生・塩川出身⁵）である。録音機器は maranz PMD661、マイクは AKG C520 を使用し、サンプル周波数 44.1 kHz 16 bit、WAV 形式で録音した。録音には（15）の枠文を使用した。

(15) 調査文

$X=nu(=/=ga^6) V+bur$. 「XがVしている。」

(15) の X には表2の名詞語根のいずれかが、Vには表3の動詞語根のいずれかが入る（なお動詞のアクセント型の区別には、動詞語根内で下降するF1型と下降しないF0型の2種類のみ認められる；言い換えれば、F2型は認められない（青井2016d: 71））。名詞語根 X に後続する接語 $=nu$ （もしくは $=ga$ ）は主格助詞である。また動詞語根 V に後続する $+bur$ は進行アスペクトを表す補助動詞である。

表2 調査語彙 (1)

アクセント型	名詞語根 X
F1 型	<i>jarabi</i> 子ども
F2 型	<i>midum</i> 妻
F0 型	<i>umma</i> 祖母

表3 調査語彙 (2)

アクセント型	動詞語根 V	
	自動詞	他動詞
F1 型	<i>k-</i> 来る	<i>mii-</i> 見る
F0 型	<i>bii-</i> 座る	<i>nii-</i> 煮る

下降中和と平板中和を説明するために五十嵐（2015）が提案した仮説が（16）の2つである。このうち（16b）については「検討すべき可能性」として挙げているに留めているが、本稿では（16）がどちらも真であるとひとまず仮定して議論を進める。

⁵ 多良間方言には大きく分けて塩川変種と仲筋変種の2つの変種が認められる。アクセント体系に関して、両変種のあいだに目立った差異は（少なくとも現時点では）報告されていない。

⁶ 主格助詞 $=nu$ と $=ga$ のうちいずれを選択するかは、先行する名詞の有生性に基づいて決定される。すなわち、 $=ga$ は主に代名詞とヒトを指す固有名詞に付加され、 $=nu$ はヒト以外の固有名詞を含む普通名詞一般に付加される（下地賀代子2014: 229）。

(16) 作業仮説

- a. 当該韻律句内に1つしか韻律語が含まれない場合、F2型のアクセント核は1つ目の韻律語に付与される。
- b. 1モーラ接語が単独で付加される場合、「韻律句の拡張」が生じる。

(16a)は下降中和を妥当に捉えるために五十嵐(2015)が導入した附則である。(16a)を仮定することによって、当該韻律句内に韻律語が1つしか含まれない環境(たとえば $X=nu=du$)でF2型のピッチパターンがF1型のそれと中和することをうまく捉えることが可能になる。しかし(16a)を仮定するだけでは不十分である。なぜなら同じ韻律構造を持つはずの $X=nu$ ではなぜ異なるタイプの中和(つまり平板中和)が生じるのかについて正しく説明することができないからである。五十嵐(2015)は平板中和の説明については今後の課題としつつも、検討すべき価値のある可能性として(16b)「韻律句の拡張」を提案している。つまり、1モーラ接語が単独で付加される接続形(たとえば $jadu=nu\ neen$ 。「戸がない。」)では、韻律句が述語まで拡張される(つまり $\{jadu.nu\}_{PWA(ne.e.n)}_{PWA}PPh$)と考えるわけである。そのように考えると、F2型のアクセントは、当該名詞語根を含む韻律語(つまり左から1つ目の韻律語)ではなく述語を含む韻律語(同じく2つ目の韻律語)に生じると記述することができ(つまり $jadunune:]n$)、その結果平板中和が生じることをうまく捉えることが可能となる。なお「韻律句の拡張」のトリガーについて、五十嵐(2015)は明言していないが、本稿では差しあたり「単純名詞に1モーラ助詞が単独で付加されること」と考えておこう。

調査文(15) $X=nu\ V+bur$ 。「XがVしている。」は「単純名詞に1モーラ助詞が単独で付加されること」という条件を満たしているため、(16b)「韻律句の拡張」が生じることが予測される。したがってその韻律構造は、(17)のような、1つの韻律句に3つの韻律語が含まれる構造になるはずである。

(17) 仮定される韻律構造①

$$\{(X.nu)_{PWA}(V)_{PWA}(bu.r)_{PWA}\}_{PPh}$$

このような韻律構造になるとき、(18)のような結果が予測される。

(18) 本調査で得られる結果の予測

- a. 動詞語根Vのアクセント型の区別が実現しない。
- b. 名詞語根Xのアクセントの3つの型の区別が実現する。

まず動詞語根Vのアクセント型の区別は実現されないことが予測される。なぜなら、多良間方言には複合語法則(松森2014: 24; 五十嵐2015: 16)が存在するからである。すなわち韻律句全体のピッチパターンの決定に関与するのは左端の語根のみであり、それ以外の語根のアクセント型は無視される。(19)に複合名詞のアクセントの例を示す。(19)の3つの例文はいずれも後部要素のアクセント型が異なる。しかし後部要素のアクセント型がどれであっても、それは韻律句全体のピッチパターンの決定には関与しておらず、前部要素のアクセント型((19)ではF1型)

だけが韻律句全体のピッチパターンを決めている。

(19) 複合名詞のアクセント (松森 (2014: 25, 27) より抜粋。表記は一部改変)

- a. *upusju+kami* 「海水用の甕」 (F1 + F1 = F1) *upusju+kami=mai* ... 「海水用の甕も…」
 {(u.pu.s^hu)^{PWd}(ga.mi)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPh}
 upu]s^hu gamimai
- b. *adan+kii* 「アダンの木」 (F1 + F2 = F1) *adan+kii=mai* ... 「アダンの木も…」
 {(a.da.n)^{PWd}(ki.i)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPh}
 ada]n gi:mai
- c. *zimami+msju* 「ピーナツ味噌」 (F1 + F0 = F1) *zimami+msju=mai* ... 「ピーナツ味噌も…」
 {(zi.ma.mi)^{PWd}(m.s^hu)^{PWd}(ma.i)^{PWd}}^{PPh}
 zima]mims^humai

予測される韻律構造 (17) {(X.nu)^{PWd}(V)^{PWd}(bu.r)^{PWd}}^{PPh} において、動詞語根 V は韻律句の左端には位置しておらず、したがって V のアクセント型の区別 (F1 型 vs. F0 型) は実現されないはずである。たとえば (20) のように、動詞語根 V のアクセント型が異なっても、名詞語根 X が同じであれば、全体のピッチパターンは同じになることが予測される。

(20) 予測されるピッチパターン① (X = *umma* 「祖母」 (F0 型) の場合)

- a. V = *mii-* 「見る」 (F1) : *umma=ga mii+bur.* 「祖母が見ている。」
 {(u.m.ma.ga)^{PWd}(mi.i)^{PWd}(bu.r)^{PWd}}^{PPh}
 ummaga mi:bu]l
- b. V = *nii-* 「煮る」 (F0) : *umma=ga nii+bur.* 「祖母が煮ている。」
 {(u.m.ma.ga)^{PWd}(ni.i)^{PWd}(bu.r)^{PWd}}^{PPh}
 ummaga ni:bu]l
- } 中和

そして、名詞語根 X の 3 つのアクセント型の区別は実現されることが予測される。なぜなら、表 1 にも示したように、当該韻律句内に含まれる韻律語数が 3 で、かつ韻律句末と発話末とが一致している環境では左端にある名詞語根 X の 3 つのアクセント型の区別が実現されるからである。すなわち *X=nu V+bur.* 「X が V している。」に存在する 3 つの韻律語が 1 つの韻律句に含まれるとするのが妥当であれば、名詞語根 X の 3 つのアクセント型の区別は (21) のように実現されるはずである。

(21a) のように X が F1 型であれば 1 つ目の韻律語 (当該名詞語根 X を含む韻律語) の次末モーラで下降し ((21a) *jarabi]nu*)、(21b) のように F2 型であれば 2 つ目の韻律語 (動詞語根 *nii-* 「煮る」を含む韻律語) の次末モーラで下降する ((21b) *ni:]bu*)。また (21c) のように X が F0 型であれば、下降は発話末に現れる ((21c) *ni:bu]l* ; なおこのとき発話末に現れる下降は Final Lowering 規則 (五十嵐 2015: 29) によるものである (脚注 4 を参照))。

(21) 予測されるピッチパターン② (V = *nii*-「煮る」(F0型)の場合)

a. X = *jarabi*「子ども」(F1) : *jarabi=nu nii+bur*.「子どもが煮ている。」

$$\{[ja.ra.bi.nu]^{Pwa(ni.i)^{Pwa(bu.r)^{Pwa}}}_{PPH}$$

$$jarabi]nu ni:bu]$$

b. X = *midum*「妻」(F2) : *midum=nu nii+bur*.「妻が煮ている。」

$$\{[mi.du.m.nu]^{Pwa(ni.i)^{Pwa(bu.r)^{Pwa}}}_{PPH}$$

$$midumnu ni]:bu]$$

c. X = *umma*「祖母」(F0) : *umma=ga nii+bur*.「祖母が煮ている。」

$$\{[u.m.ma.ga]^{Pwa(ni.i)^{Pwa(bu.r)^{Pwa}}}_{PPH}$$

$$ummaga ni:bu]$$

5. 結果と考察

本節では、第4節で提示した2つの作業仮説(16)を検証した結果を示す。本節の結果は以下の2点に要約できる：①調査文 $X=nu V+bur$.「XがVしている。」の環境では「韻律句の拡張」は認められない(つまり語根Xと語根Vは別々の韻律句を作る)(5.1節)；②F2型のアクセント核付与規則の改定(五十嵐2015)は妥当ではない(5.2節)。

5.1 「韻律句の拡張」は認められない

(16b)の仮説が正しい(つまり「韻律句の拡張」が認められる)とき、調査文 $X=nu V+bur$.「XがVしている。」には(20,21)のようなピッチパターンが見られることが予測される。すなわち、①動詞語根Vのアクセント型の区別は実現されない(F1~F0)；②一方、名詞語根Xのアクセント型の区別は、下降位置の違いによって実現される(F1/F2/F0)。

ところが実際には上記の予測に反する結果が得られた。(22)にF0型の単純名詞がXに入る場合のピッチパターンを示す((20)のピッチパターンとも比較してほしい)。

もし(22)の環境で「韻律句の拡張」が生じるとしたら、動詞のアクセント型の区別は実現されないことが予測される。なぜなら、「韻律句の拡張」によって、述語 $V+bur$ までが1つの韻律句を形成するとしたら、(22)は1つの韻律句に3つの韻律語を含む構造と分析され、当該韻律句のピッチパターンはその韻律句の初頭の韻律語(つまりX)のアクセント型のみによって決定されるからである。したがって(22)のようにXのアクセント型をF0型に揃えた場合は、動詞のアクセント型だけが異なる(22a)と(22b)とではピッチパターンが同じになる(具体的には、どちらも発話末まで下降がないピッチパターンで実現される)はずである((20a)と(20b)を比較してほしい)。

しかし実際には(22)に示したように動詞のアクセント型の区別は実現される。すなわち、(22a)のように動詞のアクセント型がF1型るときには動詞語根 *k-*「来る」および *mii-*「見る」の次モーラで下降が生じ、一方(22b)のようにF0型るときには発話末まで下降が生じない(なお、このとき発話末に生じている下降はアクセントによるものではなく、イントネーションによるも

の (Final Lowering 規則；五十嵐 2015: 29) である)。

(22) 調査結果① (X = *umma* 「祖母」 (F0 型))

a. V = *k-* 「来る」 (F1) : *umma=ga kii+bur.* 「祖母が来ている。」

{(u.m.ma.ga)^{PWd}}^{PPH} {(ki.i)^{PWd}(bu.r)^{PWd}}^{PPH}
ummaga ki]:bu]

V = *mii-* 「見る」 (F1) : *umma=ga mii+bur.* 「祖母が見ている。」

{(u.m.ma.ga)^{PWd}}^{PPH} {(mi.i)^{PWd}(bu.r)^{PWd}}^{PPH}
ummaga mi]:bu] Cf. (20a) ummagami:bu]]

b. V = *bii-* 「座る」 (F0) : *umma=ga bii+bur.* 「祖母が座っている。」

{(u.m.ma.ga)^{PWd}}^{PPH} {(bi.i)^{PWd}(bu.r)^{PWd}}^{PPH}
ummaga bi:bu]]

V = *nii-* 「煮る」 (F0) : *umma=ga nii+bur.* 「祖母が煮ている。」

{(u.m.ma.ga)^{PWd}}^{PPH} {(ni.i)^{PWd}(bu.r)^{PWd}}^{PPH}
ummaga ni:bu]]

動词语根のアクセント型の区別が実現されるという (22) の結果は, $X=nu V+bur.$ 「X が V している。」の環境において「韻律句の拡張」が認められないことを示している。しかしながら (22) の事実をもってただちに「韻律句の拡張」の可能性自体を否定することはできない。なぜなら (22) で反証されたのは「韻律句の拡張の条件が単純名詞に 1 モーラ助詞が単独で付加されること」のみだからである。したがって、他にも満たすべき条件がある可能性や、あるいは上記で仮定した条件とはまったく異なる環境や構造が「韻律句の拡張」の条件になっている可能性を今後さらに検討していく必要がある。

ただし、現時点では私は「韻律句の拡張」を多良間方言に認めることは難しいと考える。それは「韻律句の拡張」を仮定する必要性は、当該韻律句内に 1 つしか韻律語が含まれない場合、F2 型のアクセント核は 1 つ目の韻律語に付与される (五十嵐 2015: 18) と仮定したときに初めて生じるためである。つまり、「韻律句の拡張」の正当性を検証する前に、上記の五十嵐 (2015) の附則の妥当性が確かめられていなければならない。しかしながら、次節で述べるように、本調査の結果は五十嵐 (2015) の附則が妥当ではないことを示唆している。

5.2 下降 2 型のアクセントは 1 つ目の韻律語には付与されない

5.1 節で見たように、調査文 $X=nu V+bur.$ 「X が V している。」においては「韻律句の拡張」は生じないと考えるのが妥当である。言い換えれば、上記の調査文には (23) のような韻律構造が仮定される。

(23) 仮定される韻律構造② ((17) を修正)

{(X.nu)^{PWd}}^{PPH} {(V)^{PWd}(bu.r)^{PWd}}^{PPH}

(23) の構造のとき、X を含む韻律句はどのようなピッチパターンで実現されるだろうか。X を含む韻律句は韻律語を1つしか含んでいない。このようなとき、(16) の仮説からは F2 型が F1 型と同じピッチパターンで実現される、つまり下降中和が生じることが予測される。なぜなら (16a) によって、F2 型のアクセント核は、当該韻律句に2つ目の韻律語が存在しない (23) の環境においては、F1 型と同じく1つ目の韻律語に付されるからである。したがって名詞語根 X のアクセント型がそれぞれ異なる場合、(24) のようなピッチパターンが予測される。

(24) 予測されるピッチパターン③ (V = *nii*-「煮る」(F0 型) の場合)

- a. X = *jarabi* 「子ども」(F1) : *jarabi=nu nii+bur*. 「子どもが煮ている。」
 {(j.a.ra.bi.nu)^{PWα}}^{PPH} {(ni.i)^{PWα}(bu.r)^{PWα}}^{PPH}
jarabi]nu ni:bu]
- b. X = *midum* 「妻」(F2) : *midum=nu nii+bur*. 「妻が煮ている。」
 {(mi.du.m.nu)^{PWα}}^{PPH} {(ni.i)^{PWα}(bu.r)^{PWα}}^{PPH}
midum]nu ni:bu]
- c. X = *umma* 「祖母」(F0) : *umma=ga nii+bur*. 「祖母が煮ている。」
 {(u.m.ma.ga)^{PWα}}^{PPH} {(ni.i)^{PWα}(bu.r)^{PWα}}^{PPH}
*umma*ga ni:bu]

} 中和

(24) において、名詞語根 X を含む韻律句には1つしか韻律語が含まれないため、(16a) の規則によって、(24a) X が F1 型のときと (24b) F2 型のときとではピッチパターンが同じになることが予測される。言い換えれば、この環境では F1 型と F2 型とが中和する (下降中和) はずである。

それでは名詞語根 X がそれぞれ異なる場合に実際にはどのようなピッチパターンが観察されるかを見てみよう。(25) にそのピッチパターンを示す。

まず、繰り返しになるが、「韻律句の拡張」が認められないことをここでもう一度確認しておこう。もし (25) で「韻律句の拡張」が認められる場合、(21b) のように、F2 型のアクセントは動詞語根 *nii*-「煮る」において実現することが予測される (つまり (21b) ni:bu])。しかし実際に観察されるピッチパターンは (25b) ni:bu] である。つまり動詞語根 *nii*- の F0 型のアクセントは実現されている。

「韻律句の拡張」がない場合、言い換えれば名詞語根 X と動詞語根 V とがそれぞれ別の韻律句を形成する場合、(16a) で仮定した規則が妥当であれば、F2 型と F1 型が中和しなければならない (つまり下降中和; F1~F2/F0)。なぜなら、(24) のように1つの韻律語しか存在しないような韻律句では、F2 型のアクセントは、F1 型と同じく、1つ目の韻律語で実現されるからである。しかし実際には、(25) に示すように、F2 型は F0 型と中和している (つまり平板中和; F1/F2~F0)。

(25) 調査結果② (*nii*-「煮る」 = F0 型)

- a. X = *jarabi* 「子ども」 (F1) : *jarabi=nu nii+bur.* 「子どもが煮ている。」

{(ja.ra.bi.nu)^{PWα}}^{PPH} {(ni.i)^{PWα}(bu.r)^{PWα}}^{PPH}
jarabi]nu ni:bu]

- b. X = *midum* 「妻」 (F2) : *midum=nu nii+bur.* 「妻が煮ている。」

{(mi.du.m.nu)^{PWα}}^{PPH} {(ni.i)^{PWα}(bu.r)^{PWα}}^{PPH}
*midum*nu ni:bu]] Cf. (24b) **midum*]nu

- c. X = *umma* 「祖母」 (F0) : *umma=nu nii+bur.* 「祖母が煮ている。」

{(u.m.ma.nu)^{PWα}}^{PPH} {(ni.i)^{PWα}(bu.r)^{PWα}}^{PPH}
ummanu ni:bu]]

} 中和

とくに F2 型のアクセントの実現に注目して、(24) と (25) を比較してみよう。すると (24b) で予測したピッチパターンと (25b) で実際に観察されたピッチパターンとが異なっているのがわかる。具体的に言えば、(24b) で予測されたピッチの下降が (25b) では現れていない。つまり「当該韻律句内に含まれる韻律語の数が1であるとき、F2 型のアクセント核は1つ目の韻律語に付与される」という (16a) の仮説は (25) の結果から否定される。

5.3 考察

5.1, 5.2 節では第4節で提示した (16) の作業仮説 ((26) として再掲) を検討するためにおこなった調査の結果を報告した。

(26) 作業仮説 ((16) の再掲)

- a. 当該韻律句内に1つしか韻律語が含まれない場合、F2 型のアクセント核は1つ目の韻律語に付与される。
 b. 1 モーラ接語が単独で付加される場合、「韻律句の拡張」が生じる。

5.1, 5.2 節の結果は (27) のように要約できる。

(27) 調査結果の要約

- a. 調査文 *X=nu V+bur.* 「XがVしている。」の環境において、動詞語根 V のアクセント型の対立は実現する；したがって上記の環境で (26b) 「韻律句の拡張」は認められない (5.1 節)。
 b. 当該韻律句内に含まれる韻律語の数が1であるとき、F2 型のアクセントは実現しない；したがって、作業仮説 (26a) は妥当ではない (5.2 節)。

(27a) から、調査文の環境では (26b) 「韻律句の拡張」を認めることはできないことがわかる。もし「韻律句の拡張」が生じるとしたら、動詞語根 V のアクセント型の区別は失われることが予測されるからである。ただし、本調査の結果から言えることは、「韻律句の拡張」の条件が「1

モーラ接語が単独で付加される」ことではない、ということに過ぎず、したがって「韻律句の拡張」がどのような条件で生じるかの検討は今後も必要である。たとえば、述語の特性（より具体的に言えば、それが存在動詞 *bur* であるか否かなど）が「韻律句の拡張」に関与している可能性を検討しなければならない。

しかし、「韻律句の拡張」を認めることについて、現時点では私は懐疑的である。それは (27b) に要約したように、当該韻律句内に1つしか韻律語を含まないとき、F2型のアクセントは実現されないからである。五十嵐 (2015) が「韻律句の拡張」を可能性として提案する必要性が生じたのは、(26a)のように、当該韻律句内に1つしか韻律語が存在しない場合、F2型のアクセント核は1つ目の韻律語に付与されると仮定したことからである。ところが (26a) の適用条件を満たしている調査文の環境においてF2型のアクセントは実現されなかった。したがって「韻律句の拡張」を認める妥当性は低いと私は考える。

(27b) の事実をうまく捉えるためには、2つ目の韻律語が存在しない韻律句においてはF2型のアクセント核はどこにも付与されないと考える必要がある。すなわち、(28) のような適用プロセスを考えなければならない ((25) を例にとる)。

(28) アクセント実現規則の適用過程⑤：(25) の場合 ((6) を適用)

	a. F1型 <i>jarabi</i> 「子ども」	b. F2型 <i>midum</i> 「妻」	c. F0型 <i>umma</i> 「祖母」
形態統語構造	<i>jarabi=nu</i> ...	<i>midum=nu</i> ...	<i>umma=nu</i> ...
音韻構造	{(ja.ra.bi.nu) ^{PW_a} } ^{PP_h}	{(mi.du.m.nu) ^{PW_a} } ^{PP_h}	{(u.m.ma.nu) ^{PW_a} } ^{PP_h}
実現規則 (6a, b)	{(ja.ra.bi*.nu) ^{PW_a} } ^{PP_h}	{(mi.du.m.nu) ^{PW_a} } ^{PP_h}	{(u.m.ma.nu) ^{PW_a} } ^{PP_h}
実現規則 (6c)	$\begin{array}{c} \swarrow \quad \\ \text{H} \quad \text{L} \end{array}$	$\begin{array}{c} \swarrow \quad \swarrow \quad \swarrow \\ \text{H} \end{array}$	$\begin{array}{c} \swarrow \quad \swarrow \quad \swarrow \\ \text{H} \end{array}$
ピッチパターン	<i>jarabi</i>]nu	<i>midum</i> nu	<i>ummanu</i>

韻律語が1つしかないときはF2型のアクセントが実現されないとする考えは、明示的ではないが、松森 (2015) にも見られる。松森 (2015) はF2型のアクセント型を持つ *kjuu* 「今日」について、それ単独では下降が実現されず (つまり *kju:*)、それに2モーラの接語 *=mai* 「も」を付加させて初めて下降が実現する (つまり *kju:maji*) ことを記述している。

(28) の適用プロセスを仮定することで、「韻律句の拡張」を導入することなく、平板中和 (F2型とF0型との中和) を記述することができる。その一方で、下降中和 (F2型とF1型との中和) の説明については課題が残る。しかしながら、その説明の妥当なアイデアを现阶段では私は提示することができない。したがって、韻律語1つからなる韻律句の接続形では、通常平板中和が生じるが、一部の環境 (例えば *X=nu=du* ... 「Xがゾ…」) では例外的に下降中和が生じると記述するに留め、下降中和の説明は今後の課題としたい。

下降中和を妥当に説明するためには、平板中和が生じる環境と下降中和が生じる環境とを正しく区別することがまずは必要である。下降中和は「単純名詞 + 1モーラ助詞 + 1モーラ助詞」の接続形でしか現時点では観察されておらず (青井 2016a)、その実現条件を検討するための資料

が十分に揃っていない。今後は、上記の環境以外に下降中和は起こるのかどうか、起こるとしたらその環境は何か、下降中和が起こる環境に共通する特徴は何か、といった問題を探究していかなければならない。具体的には、述語を存在動詞 *bur* 以外の動詞にした場合にどのような中和が生じるか、また連続して付加する2つの助詞がいずれも格助詞（たとえば $(X=tu) Y=tu=nu$ 「(Xと) Yとが」など）の場合にどのような中和が生じるか、などのデータを今後収集・検討したい。

6. アクセントによるピッチ上昇

本稿では多良間方言の接続形における2種類のアクセント型の中和に焦点を当て、それに関わる調査の結果を報告した。しかし同調査の過程で、また別の問題が浮かび上がってきた。それがアクセントによるピッチの上昇である。同現象については松森（2016a）で最初に報告があり、次いで私が青井（2016c）で取り上げた。詳細な議論は稿を改めて論じることにはしたいが、本節では本調査で得られた結果を主な資料としながら、多良間方言のピッチ上昇をめぐって明らかにされていることと残されている課題について整理しておきたい。

まずアクセントによるピッチの上昇は(29)のような場合に現れる。3つの例文における動詞語根 *mii-*「見る」のアクセント型（F1型）の実現にとくに注目してほしい（ピッチの上昇を“[”によって示す。以下同様）。

(29) はいずれも調査文 $X=nu$ *mii+bur*。「Xが見ている。」のピッチパターンである。3つの例文はそれぞれXに入る名詞語根のアクセント型が異なる。同様の調査文(25)と比較して異なるのは、(25)の場合Vに入る動詞語根のアクセント型がF0型（*mii-*「煮る」）だったのに対して、(29)ではF1型（*mii-*「見る」）である点である。

(29b, c)を見ると、動詞語根 *mii-*「見る」のアクセントは当該動詞語根（つまり語根 *mii-* から始まる韻律句の1つ目の韻律語）内部に下降という形で現れているのがわかる（つまり $mi:]bu$ ）。一方、(29a)を見ると、*mii-* のアクセントの実現の仕方が(29b, c)とは異なっていることに気づく。すなわち、ピッチは（下降ではなく）上昇している；具体的に言えば、動詞語根 *mii-* の末尾から後続する補助動詞 *+bur* にかけてピッチは急激に上昇している。

(29) 調査結果③（*mii-*「見る」 = F1型）

- a. $X = jarabi$ 「子ども」(F1) : $jarabi=nu$ *mii+bur*。「子どもが見ている。」

{ $(ja.ra.bi.nu)_{PWa}$ }_{PPH} { $(mi.i)_{PWa}(bu.r)_{PWa}$ }_{PPH}
 $jarabi]nu$ $mi:]bu$

- b. $X = midum$ 「妻」(F2) : $midum=nu$ *mii+bur*。「妻が見ている。」

{ $(mi.du.m.nu)_{PWa}$ }_{PPH} { $(mi.i)_{PWa}(bu.r)_{PWa}$ }_{PPH}
 $midumnu$ $mi:]bu$

- c. $X = umma$ 「祖母」(F0) : $umma=nu$ *mii+bur*。「祖母が見ている。」

{ $(u.m.ma.nu)_{PWa}$ }_{PPH} { $(mi.i)_{PWa}(bu.r)_{PWa}$ }_{PPH}
 $ummanu$ $mi:]bu$

青井 (2016c: 81) において、多良間方言のアクセントによるピッチの上昇の条件について私は (30) のように整理した。

(30) ピッチ上昇の条件 (青井 2016c: 81)

- a. ピッチ上昇が生じるのは必ず2つ目以降の韻律句である (言い換えれば、発話冒頭の韻律句にピッチ上昇が生じることはない)。
- b. ピッチ上昇が実現するためには、当該韻律句よりも前の句でピッチ下降が実現していることが必要である。
- c. ピッチ上昇が実現するためには、当該韻律句の初頭にアクセントを持つ語根 (つまり有核の語根) がなければならない。

(30a) について、たとえば (31) の例を見てほしい。(31) はいずれも F1 型の動詞語根 *mii-*「見る」を含む発話のピッチパターンである。ただし (31a) は発話頭に *mii-* があるのに対して、(31b) は F1 型のアクセント型を持つ *jarabi*「子ども」から始まる韻律句に後続して現れる。

(31) 調査結果④ (*mii-*「見る」 = F1 型 ; *jarabi*「子ども」 = F1 型)

- a. *mii+bur.*「見ている。」
 $\{(mi.i)^{PWA}(bu.r)^{PWA}\}^{PPH}$
 $mi]:bu]$ …動詞語根 *mii-* の内部でピッチが下降
- b. *jarabi=nu mii+bur.*「子どもが見ている。」
 $\{(ja.ra.bi.nu)^{PWA}\}^{PPH} \{(mi.i)^{PWA}(bu.r)^{PWA}\}^{PPH}$
 $jarabi]nu mi]:bu]$ …動詞語根 *mii-* の直後でピッチが上昇

動詞語根 *mii-*「見る」のアクセントの実現に注目して (31a, b) を比較してほしい。すると (31a) では当該動詞語根内部にピッチの下降が現れていることがわかる。一方、(31b) を見てみると、同じ *mii-* のアクセントが (31a) の場合とはまったく異なる現れ方をしていることがわかる。すなわち (31b) のように、発話頭ではなく、2つ目以降の韻律句に現れる場合、ピッチの上昇が動詞語根の直後に現れる。

ただし2つ目の韻律句であれば常にピッチの上昇が現れるというわけではない。ピッチの上昇が現れるためには、次の2つの条件を同時に満たしていることが必要である。まず1つ目の条件は (30b) 当該韻律句よりも前の句でピッチの下降が実現していることである。

(32) 調査結果⑤ (*mii-*「見る」 = F1 型 ; *midum*「妻」 = F2 型)

- a. *midum=mai mii+bur.*「妻も見ている。」
 $\{(mi.du.m)^{PWA}(ma.i)^{PWA}\}^{PPH} \{(mi.i)^{PWA}(bu.r)^{PWA}\}^{PPH}$
 $midumma]i mi]:bu]$ …動詞語根 *mii-* の直後でピッチが上昇
- b. *midum=nu mii+bur.*「妻が見ている。」
 $\{(mi.du.m.nu)^{PWA}\}^{PPH} \{(mi.i)^{PWA}(bu.r)^{PWA}\}^{PPH}$
 $midumnu mi]:bu]$ …動詞語根 *mii-* の内部でピッチが下降

(32) の2つの例文はいずれも F2 型のアクセントを有する名詞語根 *midum* 「妻」が発話頭に現れ、後続する述語は *mii+bur* 「見ている。(mii-「見る」 = F1 型)」である。両者の違いは名詞語根 *midum* に付加される接語のモーラ数である。すなわち (32a) は2モーラ接語 =*mai* 「も」が付加されているのに対して、(32b) は1モーラ接語 =*nu* (主格助詞) が付加されている。

名詞語根 *midum* に付加される接語のモーラ数の違いにより、(32) の2つの例文は互いに韻律構造が異なる。すなわち、韻律語は2モーラ以上の語根もしくは接語が写像される韻律的単位であるため、(32a) の韻律構造は $\{(mi.du.m)^{PWA}(ma.i)^{PWA}\}_{PPH}$ のようになる。一方、(32b) では、1モーラ接語は先行する語根と1つの韻律語を形成し、その韻律構造は $\{(mi.du.m.nu)^{PWA}\}_{PPH}$ のようになる。このとき、(32a) では、名詞語根 *midum* の F2 型のアクセントが実現するのに対して、(32b) では実現されない。なぜなら、(32b) では当該韻律句内に1つしか韻律語を含んでおらず、したがって F2 型のアクセント核が付与される余地がないからである。

名詞語根 *midum* 「妻」のアクセントが実現されるか否かは、動詞語根 *mii-* 「見る」のアクセントの実現の仕方に影響を与える。すなわち、(32a) のように先行する韻律句でアクセントが実現する場合は上昇で現れるが、(32b) のように先行する韻律句でアクセントが実現しない場合には下降で現れる。

ピッチの上昇が現れるには、(30b) の条件に加えて、(30c) 当該韻律句の初頭の語根がアクセントを有することも必要である。言い換えれば、無核の語根 ((33) では動詞語根 *nii-* 「煮る」) から始まる韻律句においては、(33a) のように、たとえ先行する韻律句でアクセントによる下降が生じていたとしても、ピッチが上昇することはない。

なお、ピッチの上昇の位置はアクセント型の違いと連動している (青井 2016c: 80)。すなわち、F1 型と F2 型とでは (下降位置の違いと同じように) 上昇位置が異なっており、前者では当該韻律句の左から1つ目の韻律語末に上昇が現れるのに対し、後者では2つ目の韻律語末に上昇が現れる。

(33) 調査結果⑥ (*nii-* 「煮る」 = F0 型; *midum* 「妻」 = F2 型)

- a. *midum=mai nii+bur*. 「妻も煮ている。」
 $\{(mi.du.m)^{PWA}(ma.i)^{PWA}\}_{PPH} \{(ni.i)^{PWA}(bu.r)^{PWA}\}_{PPH}$
midumma]i ni:bu] Cf. (32a) *midumma]i mi:[bu]*
- b. *midum=nu nii+bur*. 「妻が煮ている。」
 $\{(mi.du.m.nu)^{PWA}\}_{PPH} \{(ni.i)^{PWA}(bu.r)^{PWA}\}_{PPH}$
midumnu ni:bu]]

(29) および (31) ~ (33) の各例文を比較して気づくように、アクセントによるピッチの上昇は、動詞語根末尾から現れる。したがって、アクセントによるピッチの下降の位置と比較すると、上昇が現れる位置はそれよりも1モーラ右であると言える (青井 2016c: 80)。

本節で記述したようなアクセントによるピッチの上昇の仕組みについての考察は稿を改めておこないたい。それを記述するためにはどのような基底表示やアクセント規則を仮定すればよいか

という問題はとくに重要である。たとえば松森（2015, 2016a）は、アクセントによるピッチの上昇を捉えるために、「アクセント核を持つモーラでの位置で、隣とは反対の音調を付与せよ」という、本稿で提示したのとは異なる音調付与規則を提案している。しかし松森（2015, 2016a）の提案は、アクセントによる下降だけでなく上昇も捉えられる点で優れてはいるが、下降位置と上昇位置が異なる事実を捉えきれておらず、さらなる改定の余地がある。

7. 結論

多良間方言は下降1型（F1型）、下降2型（F2型）、平板型（F0型）の3つのアクセント型の区別を有する。本稿では同方言における型の中和をめぐる問題を扱った。同方言では、接続形において、2種類の型の中和が観察される。1つは平板中和（F1/F2-F0）であり、もう1つは下降中和（F1-F2/F0）である。両中和は、どちらも、当該韻律句内に含まれる韻律語の数が1であり、かつ発話末と韻律句末とが一致しない環境で観察される。そのため両中和をどのように区別して説明するかが問題とされていた。

本稿では、両中和を区別して説明するために、五十嵐（2015）に基づいて、2つの仮説を設定した。すなわち、「当該韻律句内に1つしか韻律語が存在しない場合、F2型のアクセントは1つ目の韻律語で実現する」という仮説と「1モーラ接語が単独で付加される場合、韻律句が拡張される」という仮説である。しかし、本研究がおこなった調査からは、いずれの仮説に対しても肯定的な結果は得られなかった。

本調査の結果から、平板中和はF2型のアクセントの非実現として説明できる。つまり、F2型のアクセント核は、当該韻律句内に2つ目の韻律語が存在しない場合、どこにも付与されない。一方、下降中和の説明に関しては課題が残る。下降中和の実現条件と仕組みを明らかにするためにさらなる資料の収集が必要である。

本稿では、最後に、調査の過程で明らかになった別の問題についても触れた。それがアクセントによるピッチの上昇である。ピッチの上昇に関しては、松森（2015, 2016a, 2016b）や青井（2016c）で取り上げられているが、その仕組みは十分に明らかにされたとは言い難い。また、五十嵐（2015）でも属格助詞 =nu を伴う構造体（「X=nu Y 構造体」）においてピッチの上昇が観察される場合があることが報告されており、本稿で観察した現象との関連も問題である。

参考文献

- 青井隼人（2012）「宮古多良間方言の三型アクセント体系」『2012年度第26回日本音声学全国大会予稿集』7-12.
- 青井隼人（2016a）「南琉球宮古語多良間方言の音声学的・音韻論的構造の諸相」東京外国語大学大学院総合国際学研究所 2016年度博士論文.
- 青井隼人（2016b）「宮古語多良間方言のアクセント型の中和」『琉球諸語記述研究会第10回研究発表会』配布資料（2016.9.25. 於九州大学）.
- 青井隼人（2016c）「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇の記述」『日本言語学会第153回全国大会予稿集』76-81.
- 青井隼人（2016d）「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント：その特徴と型の中和」『音声研究』20(3): 66-80.

- 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』 8: 1–42.
- 五十嵐陽介 (2016) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』 150: 33–57.
- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, and Tomoyuki Kubo (forthcoming) Tone neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan, To be published in: Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal change and neutralization* (tentative title). Mouton de Gruyter.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の3型アクセントと「系列別語彙」」上野善道 (監修) 『日本語研究の12章』 490–503. 東京: 明治書院.
- 松森晶子 (2013) 「宮古島与那覇方言のアクセント交替: 3モーラのフットを持つ方言」『日本女子大学紀要 文学部』 62: 1–21.
- 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセント規則を再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』 63: 13–36.
- 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系—その韻律単位に関する考察—」『日本女子大学紀要 文学部』 64: 55–92.
- 松森晶子 (2016a) 「多良間島における文のプロソディー: 韻律句が連なる場合の音調交替現象について」『国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」キックオフワークショップ』配布資料 (2016.1.11, 於国立国語研究所).
- 松森晶子 (2016b) 「八重山諸島黒島方言のアクセントの仕組み—その韻律範疇 PwD と下がり目の出現条件—」『言語研究』 150: 59–85.
- 下地賀代子 (2014) 「南琉球・多良間島方言の格再考—ni: 格, Nka 格を中心に—」『国立国語研究所論集』 7: 227–249.
- Shimoji, Michinori (2009) Foot and rhythmic structure in Irapu Ryukyuan. *Gengo Kenkyu* 135: 85–122.

Two Types of Accent Neutralization in Miyako-Tarama Ryukyuan

AOI Hayato

JSPS Research Fellow (PD) / Visiting Researcher, NINJAL

Abstract

The Miyako-Tarama variety of Southern Ryukyuan has three accent classes (F1, F2 and F0), which are distinguishable according to the existence or non-existence of falling pitch and its place. However, they are neutralized in some environments (Aoi 2012, 2016a, 2016d). In this paper, I focused on two types of accent neutralization, falling neutralization (F1~F2/F0) and leveling neutralization (F1/F2~F0).

I tested the hypothesis for distinguishing and explaining those two types of the accent neutralization. In conclusion, I will insist on the following 2 points: (i) Type F2 does not realize if there is only one Prosodic Word in the Prosodic Phrase (PPh) in question; (ii) the result of my research does not prove the existence of “Enlargement of PPh” (Igarashi 2015).

Key words: Miyako-Tarama Ryukyuan, 3-pattern accent system, neutralization, pitch rising